

粟国恭子「伊波普猷と末吉麦門冬（安恭）の交流 明治末期から大正末期にかけてー」から（『浦添市立図書館紀要』NO. 8 p76 - 78、1997年3月）

3、ニ - チェの言葉

麦門冬が『竹陰詩稿』を発掘した時期に、『古琉球』の出版準備を進めていた伊波普猷が、ニ - チェの言葉を直訳する内容の琉歌を詠んだことは先述した。ここでは、伊波普猷とそのニ - チェの言葉について触れておきたい。

伊波は、初版には無かったニ - チェの「汝自身を知れ、そこには泉あり」の言葉を、大正5年に刊行された『古琉球』再版の序に付け加えた。

鹿野政直は、この頃の伊波の思いを「沖縄びとの精神革命への希求の高まり」の表現と、指摘している。そして、伊波を「自力による解放への土壌を培い枠組みをつくることをめざす」、「精神革命の布教者」（傍点著者）となったと位置付けている。

伊波は、新しい時代の沖縄を歩き続けなければならなかった。それは、伊波自身が十分自覚していた通り、沖縄人と共に未来へと歩み続けていくことを意味していた。

初版の『古琉球』に掲載された、脱清人の「詩に溢れる時代に受け入れられなかった志への憐れみ」からも、「その思いを伝える事の必要性」からも、再版ではその詩を削除する事で、揺れ動いた自身の感情から決別した伊波がそこには見える。つまり亀川盛棟の詩が紹介された場所に「琉球処分は一種の奴隷開放なり」の文章を配置することで、自身が持つ古き時代への交錯した感傷から決別した新しい時代と向き合う伊波の『古琉球』を示したようにも思える。

「精神革命の布教者」となった伊波にとってニ - チェの言葉の持つ意味は重要であろう。伊波は、このニ - チェの言葉をその後著作でも、講演においても繰り返し語ったといわれている。その言葉をかりて詠んだ琉歌 - 深く掘れ、己の胸中の泉、余所たよて水や汲まぬごとに - 。

自分自身の立つ場所を深く理解すれば、そこには泉のように豊かな世界が広がっているという意味だ。この言葉は、伊波の影響力だけのレベルでなく、言霊の如きその響きを持って、多くの沖縄人を魅了し、時代を越えて繰り返し使われている。伊波はもちろん、当時の沖縄の言論人達も好んで使用している。

そして現在に至るまで多くの人々が、それぞれの思いで、それぞれの場面で引用し続けている言葉である。例えば、1995（平成7）年に開館した沖縄県公文書館内部にも、この言葉は大切に刻まれ指針のごとく飾られている程である。

問題は、伊波がよく使用したニ - チェのこの言葉は、言葉の響きだけが重要なのだろうかという点である。その言葉を語ったニ - チェという存在は、伊波にとって重要ではなかったのか。そして、この言葉はニ - チェの精神のどういう背景から語られたのか。何からの引用なのか。どの時期に伊波はこの言葉に触れたのだろうか等など、次々に多くの問題が生じてくる。

今回は、問題の確認と、若干の資料を提示するに止め、問題の詳細な検討は別稿にゆずりたい。

さて従来の伊波普猷研究の中でも、この言葉の響きや心情の感覚的な部分だけが強調され、この言葉の持つ具体的な情報（出典等）はあまり知られていない。

この伊波普猷像と寄り添うように広く流布したこの言葉について図書館沖縄学研究室には、一般の人々からは出典等の質問も多く寄せられる。

出典原本は『Die Frohliche Wissenschaft』（『悦ばしき知識』）で、1881年～1886年にまとめられている。その中に収められた箴言「ひるまずに」の一節の中に、伊波が繰り返し語った言葉を見ることができる。

ひるまずに

お前のたつところを 深く掘り下げよ！

その下に 泉がある！

「下はいつもー地獄だ！」と叫ぶのは、
黒衣の隠者流に まかせよう。

(信太正三訳)

ニ - チェによってこの言葉が綴られた時代と、彼の精神の背景に若干触れておこう。『悦ばしき知識』は、ニ - チェの著作として広く知られた『曙光』(1880 ~ 81) と『ツアラトウストラ』(1883 ~ 85) の間にまとめられている。1882 年 8 月、38 才のニ - チェは『悦ばしき知識全 4 巻』を完成し出版。86 年には『悦ばしき知識』に追加する第 5 巻「われら怖れを知らぬ者」を脱稿、それを加える形で翌年に『新版 悦ばしき知識』を出版したのである。

『悦ばしき知識』について、浅井真男は「青春時代のような「生への陶醉」の気配がただよっている」と指摘している。その気配とは < 賛歌的な雰囲気 > であるという。また当時のニ - チェを「この意志は現存の < 生 > から未来の < 生 > へと進展するのであるから、同じ生の < 自己超克 > の過程を辿らざるをえない」とも指摘する。

明治の段階でどの本が出版されていたのか。当時の訳本の検討と共に、伊波がどの時点でニ - チェの言葉に触れたのかの問題は、今後詳細な検討が必要になってくる。が、ここでは可能性のある資料として 登張竹風「ニ - チェとニ詩人」(明治 35、人文社)、生田長江訳『ニ - チェ語録』(明治 44、3、玄黄社)、生田長江訳『ニ - チェ全集 全 10 巻』(大正 5 ~ 昭和 4、新潮社)、山川均訳編纂『ニ - チェ語録』(大正 6、高橋堂) を紹介するに止めたい。

註

(13) 『沖繩の淵』P114、1993 (平成 5) 年、岩波書店。

(14) 信太正三訳『ニ - チェ全集 8』、1980 (昭和 55) 年、理想社。『悦ばしき知識』は訳者によって『楽しい学問』と紹介されてもいる。

(15) 『世界文学全集 27』P485、1970 (昭和 45) 年、筑摩書房。

(16) 註(15)に同じ。